

8 月チャプレン便り

「いつまでも残るもの」

先月、熊本県において、大きな地震が発生致しました。今から10年前にも同じ熊本県において、大地震が発生し、甚大（じんだい）な被害をもたらしました。

かつて、関西淡路大震災が発生し、神戸市など阪神・淡路地域を中心に甚大な被害をもたらした時のテレビ報道を思い出します。

一人の若い男性が、瓦礫（がれき）の中で、探しものをしていました。「何を探しているのですか」とレポーターがお聞きした時に、「結婚指輪です」と寂しそうに答えていました。新築一戸建てを建ててまもなく、地震の被害にあったというのです。残ったものは、莫大なローンの返済だけでした。

私たちの目に映るもので、永遠に残るものが、はたして、この世にあるでしょうか。また、子に残せる確かなものがあるでしょうか。あるとすれば、それはいったい何でしょうか。

H 牧師が、浪人生の19歳の時、お母さまが、末期の「胆のうがん」にかかられました。お母さまは、目は黄色に顔は土色になって日毎にやせ衰えていかれましたが、苦痛を訴えることもなく平静でした。医師や看護師の方々の労をねぎらい、見舞いに来る人々に心から感謝を表し、最後の三か月は安らかであったといえます。

その頃、H 牧師は、教会にも行かず、「神さまなんていないよ」とうそぶく自称無神論者でしたが、お母さまの態度には心に感ずるものがありました。「臆病な母をこのように平安たらしめる信仰の力を見せられたようであった」と言います。

H 牧師は、お母さまの死後、教会に行くようになり、大学一年生の時に洗礼を受けられました。H 牧師は、「両親から一銭の遺産も受けなかったが、母からは信仰という素晴らしい遺産を受けたことを非常に感謝している」と話しておられます。

聖書の言葉

「このように、いつまでも存続するものは、
信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」

コリント人への第一の手紙13章13節

石川三育保育園チャプレン 北 睦 夫